神の国の豊かさに生きる　　ルカ 8:4-8

今日は種蒔きのたとえ話の箇所です。今、収穫の秋を迎えていますね。野菜や果物が豊富に出まわっています。さつまいも、ニンジン、蓮根、ゴボウ、里芋といった秋の野菜は夏の疲れを取り、冬に備えて免疫力を高める効果があるそうです。すべて最初はごく小さな種からあの大きな野菜に成長するのですから不思議なものです。しかし、よく考えればあの小さな種の時点で将来どのようなものになるかが決定づけられているわけですから驚きです。さて種蒔きのたとえには、続けてイエスご自身の解説がついているので、分かりやすく、イエスのたとえ話を学ぶ時は、かならずといってよいほど「種蒔きのたとえ」から始まります。

しかし、何度も学びながら、見落としている大切なことがあるように思います。それは、イエスのたとえ話は何を教えるために語られたのか、つまり、たとえ話の主題が何かということです。今日の話ですとここには四種類の土地が出てきます。「道ばた」(5 節)、「岩地」(6 節)、「いばらの地」(7 節)、それから「良い地」(8 節）です。ルカ 8:11 からの解説の部分を読むと、こうした四種類の土地は、神の言葉に対する四種類の態度、心の状態であることが分かります。そして、そこには試練に耐えること（13 節）や誘惑に打ち克つこと（14 節）などが教えられています。そのようなことから、このたとえの主題は、試練に耐え、誘惑に克つといった信仰生活に関する勧めだと思われがちです。もちろん、そうしたことも大切なことですが、イエスのたとえ話にはそれ以上の主題があります。

それは何でしょうか。それは「神の国」です。イエスが宣べ伝えた神の国の教えは、人々には全く新しいものでした。それで、イエスは、人々がすでに体験している日常生活のさまざまなことがらを使って、人々がまだ体験していない神の国がどんなものかを教えようとしました。そのために用いられたのが、「たとえ話」でした。マルコ 4:30 でイエスは「神の国は、どのようなものと言えばよいでしょう。何にたとえたらよいでしょう」と言っています。イエスがたとえ話で教えようとしたのは神の国のことだったのです。ルカ 8:10 で、イエスは弟子たちに言いました。「あなたがたに、神の国の奥義を知ることが許されているが、ほかの者には、たとえで話します。」ここで「神の国の奥義」という言葉が使われていることからも、イエスのたとえ話の主題が、神の国であることが分かります。

ですから、イエスのたとえ話を学ぶときには、「神の国」とは何なのか、そのたとえ話が神の国について何を教えているのかを知る必要があります。まず、「神の国」とは何でしょうか。世界には、200 以上の国があります。こうした国々には、領土があり、独立した主権があり、制度や法律があって、国民がいます。神の国も同じです。神の国は「天」にあって、神が「王」、主権者であり、その法律は「神の言葉」、その国民は「神の民」や「聖徒」と呼ばれる信仰者たちです。信仰者はこの「天」を目指して地上の人生を歩んでいます。そして天には父なる神様がおられます。つまり天を目指して生きるということは父なる神様、そして主イエス様のおられる神の家に帰ってゆくようなものです。見ず知らずのところに旅するのではないのです。ですから神の国は、信仰者たちにとって、「天のふるさと」のようなところです。「しかし、事実、彼らは、さらにすぐれた故郷、すなわち天の故郷にあこがれていたのです。」ヘブル 11:16 とあります。

また「天」は、決して空想の世界のものではありません。実際、イエスは天から地上に来て、天に帰っていかれました。この地上で天を見せ、天を約束してくださいました。イエスは、天に帰る時が近づいたとき、弟子たちにこう言いました。「あなたがたは心を騒がしてはなりません。神を信じ、またわたしを信じなさい。わたしの父の家には、住まいがたくさんあります。もしなかったら、あなたがたに言ってお

いたでしょう。あなたがたのために、わたしは場所を備えに行くのです。わたしが行って、あなたがたに場所を備えたら、また来て、あなたがたをわたしのもとに迎えます。わたしのいる所に、あなたがたをもおらせるためです。……わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません。」ヨハネ 14:1-6 ここでイエスは「天」と「天への道」を、はっきりと示しています。「わたしが道である」という言葉の道とは一般的な道ではなく、まさにその道、唯一の道だと言っています。私は道のようなものです、ではなくて私は道そのものだと言われるのです。天への道はただひとつで、それは、イエスご自身です。イエスという道を通るなら、かならず天に行き着くことができるのです。

さらに、イエスは、私たちが神の国に行くだけでなく、神の国が私たちのところにやって来たとも言われました。イエスの宣教の第一声は「悔い改めなさい。天の御国が近づいたから」マタイ 4:17 でした。また、イエスは、こうも言っています。「律法と預言者はヨハネまでです。それ以来、神の国の福音は宣べ伝えられ、だれもかれも、無理にでも、これにはいろうとしています。」ルカ 16:16　神の国はイエスの宣教によって始まりました。「天のものが地上にやって来た、未来のものが現在実現している」と、イエスは教えたのです。新約聖書学者のラッドは神の国は「すでに来た」しかし「まだ完成していない」という緊張関係の中を私たちは生きていると言いました。

イエスが生まれたとき、天使たちは羊飼いに「恐れることはありません。今、私はこの民全体のためのすばらしい喜びを知らせに来たのです。きょうダビデの町で、あなたがたのために、救い主がお生まれになりました」ルカ 2:10-11 と告げました。ここで「知らせる」という言葉には、「福音を伝える」という意味の言葉が使われています。神の国の王となるべきお方の誕生は、まさに「福音」であり、その福音は救い主がもたらす罪の赦しの福音でした。神の国は、赦しを伴ってやってきます。赦しの言葉、福音が宣言されて、神の国がやって来るのです。それで、ルカ 8:1 には「イエスは、神の国を説き、その福音を宣べ伝えた」とあって、「神の国」と「福音」の宣教が結びつけられているのです。「あなたの罪を赦す。あなたを神の国の民とする。あなたは神の国の豊かさを楽しむようになる」という「福音」を受け入れることによって、人は、神の国に受け入れられるのです。

「神の国」や「福音」の意味が理解できれば、種蒔きのたとえの意味はおのずと分かるようになります。ルカ 8:11 から、イエスご自身が、このたとえを解説しています。そこに「種は神のことば」（11 節）とあるように、神の言葉が人を神の国に導くことが教えられています。神の国は神のことばを抜きにして始まることはないのです。そして種が「道ばた」にも、「岩地」にも、「いばらの地」にも、蒔かれたように、神の言葉は、大勢の人々に語られました。しかし、神の言葉を聞いたすべての人が神の国を受け入れたわけではありません。「種」に命があるように、神の言葉には命があり、人を救う力があります。しかし、人がその命を受け入れ、その力を受け取らなければ、神の国は、その人のところにやってきません。

種は、四種類の土地に落ちました。「道ばた」は人の歩くところで、そこに落ちた種は芽を出すこともないまま、鳥に食べられてしまいました。これは、偏見や敵意のために御言葉に心を開かない、進んで聞こうとしない人間の不信仰で頑固な態度を表しています。さらにこうも理解出来ます。12 節に「悪魔が来てみことばを持ち去ってしまいます」とありますからこれはもう人間の努力や精神力ではどうにもならないものがあるということです。ですから私たちに出来ることは神様の守りがあるようにと祈るしか出来ません。主の祈りの中で主イエスは「我らを試みに合わせず悪より救い出したまえ」とただただ神の憐みを求めて祈りなさいと言われました。神に「どうぞ私を憐れんでください」と祈ることは弱く惨めな

ことでも何でもありません。

次に「岩地」に落ちた種は「芽」を出しはしましたが、柔らかい土がないため、根をおろすことができませんでした。そして、やがて枯れてしまいました。これは、喜んで御言葉を聞いても、それをきちんと理解し、自分のうちに根付くまで、御言葉を聞き続け、学び続けることのない態度を指しています。これも日々、問題無く過ごしていてもいざ「試練」が来るとその対応においては信仰によるものと言うよりは自分が持っている人生哲学、生きるための信念の方が強く出てしまう場合があります。心の岩盤と言っても良いかもしれません。みことばに教えられ、みことばに従おうとするよりは聖書はそう言うけれど、現実はそうはいかないと言い出すのです。

三番目の「いばらの地」に落ちた種は、芽を出し、根をおろすことはできても、茨に塞がれて、実を結ぶことができなかったのです。茨は「この世の心づかいや、富や、快楽」を意味します。人を御言葉から遠ざける誘惑のことです。それらは一時的な平安、楽しさによって孤独や悲しみ、怒りから解放してくれますがすぐに覚めてしまいます。こういうものを心の世界ではクイックフィックス（一時的な心の痛み止め）と言います。この場合、残念ながら、どこまで行っても、あるいはどれだけ望むものを得たとしても永続的な満足を得ることが出来ません。神の言葉に対する頑固さや、浅い理解、また、神の言葉から離れて他のものに目移りすることなどは、私たちも体験し、思い当たることがあるのではないでしょうか。

最後「良い地」に蒔かれた種は「百倍の実を結」びました。「道ばた」で鳥のエサになった種、「岩地」で根をおろせず枯れてしまった種、そしていばらにふさがれて実を結ばなかった種と、種の状態からはすこしづつ良くなってはいますが、それでも、「良い地」に落ちた種が「実を結んだ」ことにくらべれば、最初の三つのケースでは、種は無駄になっています。神は、神の言葉を聞く者に「実を結ぶ」ことを求めておられます。実を結んだ農作物はやがて刈り入れられますが、聖書で「収穫」は、神の国を表します。農夫の労苦が豊かな収穫によって報われるように、信仰者の地上の労苦は、神の国で報われるのです。人生に実を結ぶかどうかが、また、その収穫の喜びに与ることができるかどうかは、どのような態度で御言葉に聞くのかにかかっているのです。これは厳粛な事実です

どんな作物でも、実を結ぶまでは、最低一年はかかります。同じように、神の言葉を学び、理解し、それが生活の中で実を結ぶようになるには、一定の時間が必要でしょう。しかし、どんなに時間をかけても、ただ漫然と時を過ごしているだけでは、御言葉が実を結ぶことはありません。きちんと御言葉を学び、正しい知識を身につけましょう。そして、知識が理解へ、理解が信頼に進むとき、それは信仰になるのです。つまり神の言葉を聞いて、知って、分かって、信じる。その時、神の国が私たちのところに来るのです。私たちの生きているその場が神の国となるのです。あの暗く汚い家畜小屋の飼葉桶が神の栄光が満ちあふれる場となったように私たちの居る場が神の国となるのです。新型コロナ感染を意識して生きている私たちにとってそれは恵みではないでしょうか。

神の国は、二千年前、イエスの宣教と共にやってきました。そして、それはイエスの十字架と復活によって確立しました。十字架と復活によって罪と死の支配が終わったのです。さらに聖霊が降り、教会が生まれ、福音が宣べ伝えられ、神の国は世界に広まりました。やがて、神の国は、誰の目にも見えるかたちで現れます。収穫の時が来るのです。その時まで、神の言葉に聞き続け、従い続ける人は、収穫の喜びにあずかることができます。私たちは、15 節にあるように、「正しい、良い心でみことばを聞」き、「それをしっかりと守り、よく耐えて、実を結ばせる」者となりたいと願っています。そのことを祈り、また、互いに励まし合っていこうではありませんか。